



リステラス星圏史略
古資料ファイル
3 - 4 - 1



『 五月病 』
～ Love Story ～

(高校1年)
(発掘作業宙)

柊実真紅

as

霧樹里守 is 土岐真扉

(献辞)

"LOVE STORY"

...温泉高校始末記...

柊実真紅

敬愛するNaNaちゃんに捧ぐ

(草稿)

(草稿)

— LOVE STORY —

『 五 月 病 』

by 柊実ノ真
柊実真紅

きええっ！

枝折り戸（しおりど）をあけたとたん、気合が響きわたった。

ついで文字にならないカエルの断末魔のごとき絶叫が、ゴールデンウィークあけの天気もいいある日、ご町内の朝の静寂をばりばりとはぎとってゆく。

「...その服、お脱ぎでないかえ」

ばしっと張りつめた年配者の声に、

「やだ！」

ひとこと逆らうセリフだけは勇ましい。

ぴしばしと何かが投げつけられる音。

「おばーちゃん、堪忍~~~~っ」

孫のまこは悲鳴をあげていた。

(逃げよう。)

一瞬本気でびびった彼は自分を情けないとは思わなかった。

あの祖母様はこわいのだ。

とはいえ貴明（たかあき）も男である。

幼馴染どころか乳兄妹も同然の無二の親友、兼エトセトラを見捨ててトンズラしたとあっては末代までの名折れ...は建てまえで、その後の恨みつらみに罵詈雑言、まこの仕返しのほうがよっぽど我が身にこたえる道理である。

とりあえず、声などかけてみる。

手入れのいきとどいた純和風の庭ごしに、

「まーこっ、学校いくぞォ～...」

ぴたり、と気配が緊張する。

現場はどうやらすぐ目の前の、広い縁側のある南の八畳らしい。

ガラス障子のうわべりごしに、和服の襟の白髪と、天パーぎみの栗色あたまが見える。

じり、じりり。

竜虎あい討つか、小次郎と武蔵の決闘か、どっちも武道をたしなむ過激な家系である。円を描いてスキを狙う、足の運びにも油断はないのだろうが。

(...不利だなー...)

貴明は苦笑した。

じつのところ躰の厳しかったまこは、目上の人間、しかも女性ときては絶対に暴力はふるえない。防戦一方の弱輩に、対するおばーちゃんの手にはしっかり稽古用の日舞の扇が握られている。

これは...当たると痛いのだ。

と。

高田家・朝の一戦はまこの奇計で終わりを告げた。

くるりときびすと反すと、百八十度にじりあった睨みあいの転回したおかげで無防備になっていた、背後のふすま...たぶん祖母様の入って来た侵入口...をいきなり突破して、どたどたと階段ふみ鳴らして二階に駆けあがる。

自室だ。

足音につられて貴明も外に出た。

「たかっ、受けとれ！」

重いブタかばんが築百年のお屋敷の、つつじの生け垣ごしに窓からふってくる。

うわっと抱きとめてよろめく貴明のかたわらに、手にした靴をはくのももどかしく、カーテンひるがえし朝陽を逆光にして、特撮のスタントよろしくまこは飛びだした。

「 いやっほ〜〜〜いっ！」

着地10.00（じゅってんれいれい）。

自由の翼、満喫。

すでに全身でハートを表現するノリだ。

(.....やっぱり.....。)

見るなり貴明は頭をかかえた。

ラフといおうかいなせといおうか、みごとに<ずして着こなしたその姿着崩したそれは、きっぱりと、学ランだったのである。

「.....おまえ、どうしたんだ、それ」

「となりのにーちゃんのお古っ」

アーメン。

はずむ返事に、にわか信徒してしまう。祖母様が怒るのもそりゃあ当然だろう。

「お待ちっ！」

さすが足袋（たび）はだしというわけにもいかず、濡れ縁から叱り飛ばす後悔のたねはとりあえずおくとして。

すたこらと二人は三十六計をきめこんだ。

(参照したければ資料)



<http://85358.diarynote.jp/201705062207377861/>

[...温泉高校始末記... \(柗実真紅\) 『五月病』 \(草稿1\) \(...高1?\)](#)

2017年5月6日 [リステラス星圏史略 \(創作\) コメント \(1\)](#)

(2)

「きゃああ。まこってばっ、美形よおっ」

案の定、クラスの女子の反応は、ヘリウム風船ほどに軽い。

出席番号三十八番、高田まこ。本名、真（まこと）は溜め息の出るほどすばしこく細い脚をした、生物学上はたしかに女だったと思うのだが。

「う～ん、美少年。華奢っぽくて、こうして見ると、その身長でも小柄だもんねえ」

「よせよおっ」

"男" に言うべきじゃない禁句を連発されて、ウドの貴明のとなりでまこはムスくれる。

身長百六十五センチ体重四十七キロ。ソバカスの浮くほど白い肌は猫茶色のフワフワ頭とあいまって、教室のなか、ひときわ明るく映える。

机に腰かけ、足を組む。

わけもなく飛びおりて、踏んだ踏まないの鬼ごっこの果てに廊下まで出張してはまたバタバタと戻る。

眼が、やっと自分をとり戻せた興奮で、誰をも魅きつける強い光輝を宿していた。

孤立していたはずの周囲に、人垣ができています。

(.....やれやれ。)

いつの間にか自分が追いやられて傍観者しているのに気づいて貴明は苦笑する。

きのうまで、目立たない、はずれ者の、むしろ外された存在だったのだ。

実際おんなの制服のときには、はっきり言って虚弱体質そうな不良少女、という風にしか周囲には見えてなかったのに違いはない。

そのくらい、まこはぐたっと死んでいた。

「五月病なんて上等だぜ」

貴明のセリフに、てめーもスカートはいてみろってえんだ、と、不気味な迫力をこめて呟いた。

さすがにもう限界だろうとは思いはしたのだが。

「...にあうん、だけどな。」

日変わりのピンクのリボンをもてあそびながら言う手をふりはらい、ひとりサボって早退したあげくの休みあけが、これだ。

...て、ウドの貴明のとなりで彼女はムスくれる。

身長百六十五センチ体重四十七キロ。ソバカスが浮くほど白い肌は猫の色の白さは栗茶色のくせつけとあいまって、教室のなか、ひとときわ明るく映える。

はじめたHR（ホームルーム）で、驚いたことに教師はなにも言わなかった。してみると入学早々に先輩がたから聞かされた、"なにがあらうと無関心" というここの教師についての噂はダテではないらしい。

~~いやたんに、男装した女生徒というものの、存在にも可能性にも、気がつけなかつただけなのかもしれないが。いっしゅん、貴明はどこかのスーパーで袋づめした"常識"を売ってやしないかと、財布のなかみを勘定する気になった。~~

あきれつつ、おとなしく数学をひろげて斜め前方横の様子をうかがう。

~~三つ前の席。~~

背すじをシャンと伸ばして黒板を見る姿は、いっそ見事なほどに異和感も不自然さもない。

(そらそーだわ、な)

集中して授業をうけているようでいて、眼が、やっと自分をとり戻せた興奮の、誰をも魅きつける強いひかりを秘めていた。

二律背反する思考に彼女の相棒はため息をつく。

ぐてぐてとのたくり腐っているような、きのうまでの服をきた倦怠ぶりはどこへやったのだろう。実際、"女装"姿のまこはと言えば、よくてせいぜい低血圧の不良娘。はっきり申せば二日酔いのスケバンで、目つきは悪いわ言葉は荒い乱暴だわ、きょうキャピキャピと取りまいていた連中に、かなりのとこ怖がられていたのも事実である。

「五月病なんて上等だぜ」

貴明のセリフに、

「てめえもスカートはいてみな」

と、根暗な迫力をこめて呟いた。

「にあうん、だけどな」

ペンタレースのリボンをつついでつつい引っぱって言う手をはたき落として睨みつけ、ひとりサボって早退したあげくの休みあけが、これだ。

まあいずれ爆発するだろうとは思っていたのだが。

(参照したければ資料)

↓

<http://85358.diarynote.jp/201705072128488768/>

[『五月病』 \(草稿の3\)。\(参照画像追加w\)](#)

2017年5月7日 [リステラス星圏史略 \(創作\) コメント \(1\)](#)

(4)

ことのおこりは十数年前、二月のある朝にさかのぼる。

~~—母親が、出て行ってしまったのだ。黄水仙の咲く小さな家を。~~

~~—その間、夫婦の事情がどんなものだったかは知らない。~~

~~—ひとつ確かなのは、長くニューヨークでばりばりのインテリアデザイナーとして活躍していた彼女が、ちかごろ帰国して、どうやら正式に再婚したらしい。~~

~~—ひとつ確かなのは、帰ってきてはじめてその事を知った親父さんが、~~

とてつもなく派手な夫婦喧嘩をやらかした挙句、さっさとニューヨークに逃げられて、

「あなたなんかより仕事の方がずっと面白い」

宣言してのけた妻を相手に、

「女なんか2度と信じるもんか〜〜っ」

と、熱血ヒラ警官の親父さんは太陽に吠えてしまったのだ。

その夜のうちに母親ゆずりの娘の長いおさげを切り、ズボンをはかせて、自分のことを"おれ"というように仕付けなおしていた、という事だ。

近所の剣道場にほうりこまれて貴明（たか）たちと走りまわることになった往年の小町娘の卵は、一途といえは純情なほどの思いこみの激しさでが功を奏してか、あっという間にガキ大将で名前をはせることになる。

小学校の六年間、黒いランドセルをしょったまこはいつでも泥だらけの傷だらけ。

それでも、中学に入れば自然に...という周囲の期待もむなしく、一計を案じた親父どのは自由服の私立校に進ませてしまった

あいかわらず、まこは男だ。

よく食べてよく伸びたので、事情を知らない人間はそもそも女だろうとも思わない。

ふくらまない体質が災いした。

まこときたら道場主である貴明の父を説き伏せて、少年剣道男子の部、で、県大会まで行った
りしているのだ。

そこで、祖母様が、ついに決意を固めた。

父方のではない。

出ていったかーちゃんの方の、である。

(参照したければ資料)

↓

<http://85358.diarynote.jp/201705072149364943/>

[\(草稿の4\)](#)。

2017年5月7日 [リステラス星圏史略](#) (創作)

ことのおこりは十数年前、二月のある朝にさかのぼる。

「あなたなんかより仕事のほうが、ず〜っと面白いワ」

宣言してのけた妻を相手にとてつもない派手な夫婦喧嘩をやらかした挙句、さっさとニューヨーク支社に逃げられて。

『女なんて二度と信じるもんか——っ』

と、熱血ヒラ警官の親父さんは太陽に吠えてしまったのだ。

それでも妻を溺愛しきっているものだから、こうなったらヤケである。

「いいか、まことっ」

「まことじゃないのよ、まこちゃんよ」

「おまえの本名は真（まこと）なんだ。戸籍にもちゃんと載っている。そもそも男がほしかったのを、あきみのやつ、おれを裏切りやがって....」

「いいか。今日からおまえは男だっ」

「...うん...」

そのころのまこはといえば、まだ養育者に逆らおうなぞ思いもよらない素直で柔順な子供である。

その夜のうちに母親ゆずりだつた長いみごとなの長いおさげを切り、自分のことを"おれ"と言うように仕付けなおされていたられたというわけだ。

「まずは男は、たくましくなくっちゃいかん」

近所の剣道場にほうりこまれて貴明（たか）たちと走りまわることになった往年の小町娘のたまごの予備軍は、一途といえば純情なほどの思いこみの強さが功を奏してか、あっという間にガ

キ大将で名前をはせることになる。

小学校の六年間、黒いランドセルをしょったまこはいつでも泥だらけの傷だらけ。

それでも、中学にあがれば自然に...という周囲の期待もむなしく、一計を案じた親父どのは自由服の制服のない私立校に通わせてしまった。

あいかわらず、まこは男だ。

よく食べてよく伸びたので、事情を知らない人間はそもそも女だろうとも思わない。

ふくらまない体質が災いした。まこときたら道場主である渋る貴明の父を説き伏せて、一少年剣道男子の部、で県大会まで行ったりしてるのだ。

...あやうく男として全国まで行きかけたところで、ついに、祖母様が堪忍袋の緒を切った。

父方の、ではない。出て行ったか一ちゃん母親の方のである。

この一戦も、とっっても見物（みもの）ではあった。

「お義母さんっ、大体ですねえっ」

「だまらっしゃい！」

ベン！と座卓をはたいて、

「別居中とはいえ離婚（わかれ）たわけでもない以上、娘あきみの子供はあちしの孫です。

弘行さんの好きにばかりはさせられませんよ！」

惚れた弱味とはこれを言う。

勝手に出て行って十年間、いまでも夏とクリスマスにはへらへら帰ってきてまこを買い物に連れだしたりする妻に、彼はいまだに離縁を申し渡せずにいるのである。

「うっ...」

相手が、悪かった。

明治うまれの最後の芸者、きっぷのよさを売り物に、いったん軍人の妻後添いにおさまったはいいものの戦後のどさくさで夫を亡くし、あと、度胸と三味線だけをたよりに三十年増が花街にかえり咲いてみごと子供を育てあげ、名と財まで築いてしまったという...あるく「女の昭和史」のようなひとなのだ。

~~―病気の夫を逮捕しに来たGHQを相手に、モゼルをぶっ放して追い払った、という武勇伝まで、ある。~~

男の弱味などいまさらお見通しだ。

絶句する父親をしりめに問答無用、中学卒業を機に、まこはあちしが引きとりますからね...と、本人の意志をまるで無視したとり決めが元凶だった。

扶養家族は、分が悪い。

(参照したければ資料)

↓

<http://85358.diarynote.jp/201705072214185818/>

[\(草稿の5\)](#)。 [\(おまけ画像つか\)](#)

2017年5月7日 [リステラス星圏史略 \(創作\) コメント \(4\)](#)

「...腹がへったよ————っ!!」

案の定、まこが騒ぎはじめたのは二時間目も終わらないうちだった。

「あー、そーかそーか、よしよし」

「ハラが、へった、んだ。」

「いいこだから席に戻って自習しな」

「チッ！ せめて朝メシは喰ってから着げーるんだったぜっ」

「まったくだ。これで三日間は、メシ抜きだろうおまえ。」

.....。

ジト目光線が飛んでくる。

「冷たいなあ、貴明っ」

「良い子のたかクンは年長者の味方でね」

「なーにが言いたいのかな？」

「わかっていると、思うが」

周囲（まわり）のクスクス笑いにニガ虫を噛みつぶしている貴明である。

~~これではまるで、あぶない世界じゃないか。~~

「おれたち、親友だよなっ♪」

めげない。

貴明のネクラなものの言いでひるむくらいの浅いやついつきあいではない。

「 あ〜〜〜...」

根負けして、早弁用だったパンを放ってやった。

「サンキュっ！ え、ベントーじゃねーの？」

「今日は学食なんだ」

「ふ〜ん.....？」

とりあえずの収穫に意識気をとられたのか、めったにない事にも興味関心は示さず席にかえってゆく。

「やあだ、まこってば、早弁すんのー？」

キャラキャラ笑った女の口たちからお昼のピクニック用、ポットの紅茶をわけてもらって元気に食っている。

.....今日はいいい御身分だね、マコト君。

横目でにらんで、貴明はプリントに注意をもどした。

次の時間4時間目は体育である。

「おまえなああっっ」

さすがに貴明の悲鳴と女子の級長の良識に気圧されて、着替えだけは生物学上の区分に従う気になったようだが、授業がはじまって整列してみるとやっぱり男子の陸上にまぎれこんでいる。今日は記録をとる日だ。

「本気でベルバラしとるのか、おまえは」

噂はとどいていたらしい。クラブの顧問でもある体育教師に出席簿でこづかれて列から追い出され、

「なんだよっ！ どーせジャージは男も女もないじゃんか。オレあそんじょそこらのヤローには負けないぜっ。...ちゃんと記録をとれよーっっ...」

絶叫とともに女子のバレーコートに引き渡される。

「それが教師への言葉使いか？ バカモノ、おまえに入られた日にゃ、ほかの連中のプライドが壊滅するわいっ」

男女の区別のない、ここがアメリカ式のタラス編成ならよかったのにと貴明はふと思う。

まこの通った私立中学はそういうタラス編成方針だったらしいようだ。

してみると、まこの親父殿は...

「あずま」

「はいっ！

計測ははじまっている。

一番、東貴明（あずま・たかあき）は、あわてて位置についた。

じっさい気の毒なほどなのだ。

ただでさえバレーコートは広くはない。そこへ六人も九人もつめこんで、

「はあい♪」

「そーおれっ☆」

なんて長閑（のどか）にやっている連中を相手に、まこにどうしろというのだ。

熱くなりやすい性格だ。

本気でスパイクなんぞした日には結果は、女の子達の悲鳴と非難。

案の定ふたりばかり顔面直撃で医務室送りにして、まこはしおしおと、申し訳なさそーに審判台にのぼった。

貴明はダントツで陸上部員にハる記録を作る。

その、彼と、ころげまわって育てて一步もひかない体力と運動神経を、まこは持っているのだ。

（ホント、女じゃないよなあ）

気をつかい、気をつかいして、相手の力量のレベルまで一生懸命おさえている。その困惑しきった苦笑の顔は、貴明たちのするだろう表情と少しも変わらない。

...もっとも正真正銘の男なら、別の意味でもうすこし嬉しいだろうが。

放課後、まこを裏庭へ誘った。

なしくずしに計測がのびて昼休みが潰れた体育のあと、五、六時間目の洗濯授業で移動したまま、普段ならばばらばらに帰る日だ。

わざわざ先まわりで呼びとめられてきょとんとしてついてきたまこは、貴明の手に用具室の鍵があるのに気づいた途端に、あ、と、ひどくはしゃいだ顔になった。

「やりっ！ らっきいっ!!」

「動き足りなかったんだろ？」

今日は各部一斉の定休日だ。クラブで使わない時には、一般生徒も学校備品を借りてかまわないことになっている。

迷わず、剣道場へ行く。

「さっすが解ってらっしゃる。へへっ、たかあ、愛してるっ」

一瞬。

「... おまえな。」

「ごめん」

「ああ、いいよ」

かるい、ため息。

勢いあまって抱きついてきたまこの腕をはずさせて、べつに、と貴明は歩きだす。

本気で聞きたいセリフを社交辞令で尹カルク叫ばれたって、嬉しいわけがあるはずもない。

貴明がまこを相手に "告白" というものをやらかしてから、そろそろ半年がたとうとしていた。

それは中学三年の二学期もおしつまったある日、町の剣道場でも受験生のための活動停止期間が始まる。

まこは、それを限りに道場そのものを辞めさせられる約束だった。

それもこれも、みんな祖母様のせいだ。

貴明は知らなかった。卒業しても、高校へ進んでも、ここへ来ればまこには会えるとばかり思っていたので...

「まこっ！　いまの話、マジか!?!」

追いかけて捕えた引き戻した腕にはいつもの元気はなかった。

「そーだよ。ここやめて、ガッコも変わって、ハナヨメ修行やるんだと、おれが」

「なんで黙ってた」

「言えるかよ。...急に、決まったことだし。」

「...それで、どうするんだ」

訊くと、皓皓三年間で女として躰なおして、どこかへ嫁にやるつもりらしいぜと、言う。

春からは暮らすのも少し離れた祖母様の家でだ。

もう、会えないかなあと白い首をかしげてほほえむ心細さに、つい、

「ばかやろうっ!!」

理性だのプライドだの、日頃貴明が愛用している一群がそろってショートした。

「おれはおまえが好きなんだぞ。それを、もう会えない、で済ませる気かよ！」

「 たか 」

怒鳴るように投げつけられた言葉の重さを、まこはしばらく、受けとめかねて呆然と佇んでいた。

「………… おまえ、変態（ホモ）だったのか」

ぶっちん。

あんまりな反応に貴明の頭のどこかが音をたてて引きちぎれ、その日は、その話は、それきりになってしまったのだったが。

帰ってから彼は猛烈に後悔する。

へたをすればこのまま会う機会もなくなる大切な人間に、変態と断じられたまま、というのは、いくらなんでもな立場じゃないか。

煮つまれば行動は素早いA型牡羊座。

推選の決まりかけていた男子校を蹴りたおして、やおら受験勉強にとりかかり。

まこのひだスカート姿を毎日おがめる権利を手中にしたと、いうわけだ。

(参照したければ資料)

↓

<http://85358.diarynote.jp/201705122023467433/>

[\(草稿 8\)](#)

2017年5月12日 [リステラス星圏史略](#) (創作)

「…………えーい畜生、もう一本！」

はああっ ……気合いもろとも貴明にぶつかっていかくる。

無制限勝負だから二人とも動きづめだ。借り物の防具も竹刀もさすがに学校備品だけあって体に合わないが、打ち込みはじめてしまえばそんなことはすぐに忘れる。

すり足で小手を狙う。はらって右胴に行く。

すくい上げて反すかたなで面、とっさによけてまた小手。

びしばしと、打ちこまれる数が多いのはまこの方だ。さすがに、半年のブランクはきついらしい。

「動きが甘い！」

すりぬけざまに見事な、胴をとられそとってみせるとやけを起こす。捨て身で免にいかこうとせよこようとするのを

「上段にばかり構えるなって言ったろ！」

「ったあ〜〜〜っっ」

痛烈に小手から竹刀をはじき飛ばされです。よけそこなって尻もちをつく。

(おまえ、ホントにおれに惚れてんの?)

内心、ついあきれて訊いてしまうほど、それは厳しい一撃だった。

手加減がない。

それが、嬉しい。

「……くそっ！」

かまえ直すなりまた始める。

貴明は剣道で食べていくつもりだ。

まこはただただ、動くのが好きで、負けるのが嫌いだ。

二人で道場をやるのかなどと言っていたこともある。

たんなる子供の夢だったのだが、貴明は、もしかして違う意味で話していたのかも知れない。

好きだ、と言われて、まず感じたのは...

頭にくる、だった。

「おまえまで、女と思ってつきあってたのかよ」

なにを考えたのか冬休みにはいつから三日とあけずに電話を七てくるよこす貴明と、まこはさんざん喧嘩をしたのだ。

「そんなこと言ってないだろ」

「じゃあどういうつもりだよ」

まこの志望校を訊き、いっしょに受験しようという。

市内でもそれなりのレベルの公立校は、まこには楽だが、貴明にはけっこう苦しい賭けだったはずだ。

「おまえが男の恰好だろうがスカートはいて化粧しようが、オレは構わんけどな。世間さまにゲイだって思われるのがヤナだけで...」

「それじゃなにか？ おまえは自分の世間体のためにおれの一生を犠牲にしよーってワケ」

「...先にひとを変態あつかいしたのはてめえだろうが」

「エイズやだ」

「ならんとゆうにっ」

どこまで行っても話題は平行線で。

「だいたい

↑

(ここまでバツテンで全没w)

すくい上げて返すかたなで面、とっさによけてまた小手。

びしばしと、打ちこまれる数が多いのはまこの方だ。さすがに半年のブランクはきついらしい。

「動きが甘い！」

すりぬけざまに見事、胴をとってみせるとやけを起こした。

捨て身で面打ちにくるのへ

「上段にばかり構えるなって言ったろ！」

「ったあ〜〜〜っ」

痛烈に、小手から竹刀をはじき飛ばす。

よけそこなったまこは尻もちをつく。

「……おまえ、ホントにおれに惚れてんの？」

「 雑念！」

無責任な発言にいちいち相手をしていたら、まことつきあってなぞいられない。

ばすっと面をひと打ちしてやると、ふいぎゃあと喚いて、それでも飛びおきるようにまこは構えなおした。

眼が、強い光をおびている。

手加減がない。

それが、まこにとって一番嬉しいのだということを、貴明は知っている。

「……くそっ！」

一瞬の間をとってまた始まる。

陽が、西にかたむくまで二人は疾りつづけていた。

(参照したければ資料)

↓

<http://85358.diarynote.jp/201705122043043563/>

[\(草稿 9\) \(まるごと半分まで「没」ページ☆\)](#)

2017年5月12日 [リステラス星圏史略 \(創作\)](#)

まことを相手に全力を出しきったあとで動きまわったあとに、さらに道場の乱稽古に顔をだす、というのは案の定、さすがにやはり度がすぎた。

「さすがのタフネスたかくんも、空腹には勝てませんでした、っと」

風呂で汗をながしてから玄関先のカレンダーで日数をたしかめる。

うええ。

気の遠くなるような...換算すると何食分だろう...残り時間に、本気で足がフラつきかけるとい
うのはなかなか情けない。

人間、昼の学食のラーメン一杯で何日この運動量を維持できるもんだろう？

(意地はらんでオフクロについて行くテだったか知らんなな、これは)

嘆息深々。男子たるもの、いまさら遅い。

食糧調達の頼みの綱だったまこまでが、時を同じくして祖母孫（おやこ）断絶をしてこよう
とは、まさか計算に入れていないではないか。

「...はら... へった...」

十六歳。成長期にとってこれほど切実な問題など、ない。

せめて台所でお茶でも呑むべえかと、きびすをかえしかけた時。

カラカラ...

ひどく遠慮がちに、古びた棧木（さんぎ）のおもてのガラス戸がひきあけられて、

「あ... のさあ、たか」

細い狭いすきまから、まこが顔だけ、ひどく困った表情をして覗かせた。

「へ?!」

らしくない大人しげな行動に、面くらった貴明は数瞬絶句する。

「着換え、貸してほしいんだけど…」

「どうしたんだ、入って来いよ」

表の電気のスイッチに手をのばしかけると、

「あっ…付けるなっ」

ひどく、あせった声。

なにかに気づいて有無を言わせず、扉をあけ、細い姿をなかに引き入れる。

「 ! ………まこっ !! 」

血相を変える、とはこういうことなのかと、貴明はどこかで思った。

何があったかなど訊くまでもない。

袖のはずれかけた学ランは泥だらけになり、Yシャツのボタンは千切れ、なかの、下着までひき裂かれて、肌はアザだらけになっている。

かすかな白い胸ふくらみに砂利のこすれた血のあと。

息も、つけない、怒り。

「だれに、やられた…?!」

コロシテヤル、と。

押し潰したように絞り出す声が悪夢のように自分のものだとは、だから、必死になったまこに揺さぶられるまで気がつくこともできなかったのだ。

「落ち着けっ！ ...なにもなかったっ。おれ、だいじょーぶだから、たかっ！

...貴明...っ！」

そのまま飛び出して行きかねない勢いだった彼の腕を、はっと気づくと痛いほどぎりぎりの力で握りしめている。

「...ほん...とうに...無事だったんだな.....？」

「うん。おれ、こんなことでダチが殺人罪なんてのは、やだからね」

きっぱり言い切られ、苦笑して、肩の力がぬける。

「...アホお... あんまし驚かせるんじゃない...」

抱きしめる。大切なものだから。

「 ... たか ... ？」

むきだしの胸が、スウェット一枚の彼のからだにあたり。

ながく触れていたら下種の仲間入りをしかねない。

すとなと、彼はつきはなした。

「風呂、わいてる。入ってこい」

「う、ん。」

ひと息ついたらまこに茶だけ出して...見るからに恨めしそうな顔をしたがなにしろセンベイもないのだ...訊きだしてみた事情は、こうだった。

自由を獲得するにもまずは軍資金（食費）だと、あのあとバイトを探しに行ったのだ。高校生として地元はさけて、丘の反対側のふたつむこうの、市内じゃ一番の繁華街のあたりまで。

かえり、尾けられているとはまさか思わなかった。

夜も遅くなったしと、つい抜けた近道の公園で、声をかけられてふり返るなり茂みに引き倒されていた。

「...んなっ.....?!」

このところ、喧嘩はごぶさただったから暴れる。とにかく暴れる。

相手は四人はいたのだろうか。

そのうちに遅まきながら向うの意図に...ようやく...気がついて呆然とする。

外見が外見だけに、今までそういう対象に扱われたことがはなかったのだ。

「や...めろよ... 何、すんだよっっ!!」

怖い、と、その瞬間、本気でからだ~~が~~すくんだ。思った。

防犯ベルを持ち歩く、普通の...女のコたちの気持ちは、だから、普通はこんなふうだったのだ。

「...たすけ...っ」

すくんだ体をねじふせられ、ボタンが千切れ、下着ごとズボンがおろされかけて。

.....

一瞬の、沈黙。

遠くの常夜灯のてりかえしで、剥き出しのまこのからだは白く浮かびあがり...

は、いいが。

「なに... こいつ女じゃんか。」

ぐわたっ！

たかは、おもわず、茶碗をひっくりかえした。

「いっやー、あれってばホントにマジで世に名高い変態（ホモ）さんなんだぜえ〜っ」

おれは初めて見た。と断言してほとんど嬉しそうに気色悪いキモチワルイときゃいきゃい騒いでいる声に、貴明は思わず座卓につつぷしたまま耳をふきいでしまう。頭をかかえてしまう。

例の"告白"の時のショック以来、ホモの一語をまこの口から聞くとめまいがするくらいだ。

「げーおれ、傷口からホモエイズになったらどーしよー？」

「ならんならんっ」

なられてたまるか、とも思うが。

~~とりあえず~~貴明は時間も遅いことだし送って行ってやるからと、まこを追い出すことにした。

「えーっ 帰んの？ いいじゃん泊めてくれよっ」

「アホッ」

とにかくホモのエイズのと罵られてまで本気で惚れてる女を押し倒す根性は貴明にはないのだ。で、あれば、風呂あがりの上気した肌でこれ以上ふたりきりの家のなかをうろうろされてたまるものか。

「おまえ、歳（とし）、自覚しろよ」

どついてしまう。

「うるせー裏切者」

しっかり反撃してくるのを、よけて、薄着薄いスウェットのまこに触れないよう迂回して玄関にむかう。

.....と。

あがりかまちに腰かけようとした時、唐突に世界がゆがんだ。

「.....あれ？」

視界が暗くなる。冷や汗まで出てきているようだ。

「...たか、おまえ、顔色悪い... うわっ！」

覗きこんだまこを巻きぞえにして、もたれかかるように貴明は倒れてしまった。

「...騒...ぐな... 気がゆるんだら... 腹がへっ... 」

暗転。

電話のむこうの祖母様に必死になって助けを請うている、まこの泣き声だけが、耳にのこった。

(泣くなよ...)

夢を、視ていた。

(泣くな...)

ああ、そうだ。

あの頃、古い小さな借家で、ふたりの家はお隣さんで。

生垣のかけでうずくまる子供の腕には焼かれてしまった人形。

背のたかい女の人は黄色いスーツを着てどこかへ行ってしまった。

帰ってきた女の子の父親は、電話をちぎって投げ飛ばし、ドレスやら鏡台やら、残された女のものすべて庭の焚き火に投げ捨てて。...次には子供の絵本やカーテンまで。

(燃えちゃったの)

(泣くなってば)

どろどろになったセルロイドの残骸をふたりしてお墓に埋めた。

膝をついて泥を掘っているのに白いふわふわした服にはなぜだか汚れもつかず、長くのばしたおさげ髪がゆれて...

小さな、小さな女の子。

次の朝あったとき、その子は、もう髪を切り男の服を着て、きのうまでのようではなくなっていたけれど...

(おまえなんか、嫌いだっ！)

すっかり憎たらしく成長したまこがスタジャンにジーンズ姿で言う。

めでたくも、まわりは振袖きつね襟巻の大群...合格祈願だと誘いだした（じつは顔が見たかったのだ）新年も一月一日で。

年末いっぱい強火で煮こんでいたらしい焦げた心理状態

(泣くなよ...)

夢を、視ていた。

(泣くな...)

(燃えちゃったの)

暗い生垣のかげにうづくまる、子供の腕には焼かれてしまった人形。

(燃えちゃったの)

(泣くなってば)

小さな、ちいさな女の子。

つぎの朝あったとき、その子は、もう髪を切り男の服を着て、きのうまでのようではなくなっていたけれど...

(たかあっ、早く!)

白い脚（あし）をむくだしに伸ばしてどこまでも駆けてゆく。

対等で、対等以上で、いつだって言いだすのはまこ、走るのもまこだった。

そうして...

泣くのも、ひとに謝るのも、まこのほうが先なのだ。

(たか... だいじょうぶ.....?)

耳元で小さく呟かれた声に、うん、と貴明は答えた。

目が覚めると、朝である。

庭先のすずめの声に、はにかえたばかりの白い障子ごしに射しこんでくる眩しさ。

まこの家だ。

ぼんやりと首をめぐらせるとそこにまこがいた

着物... 和服だ。

目が覚めると祖母様の家だった。

まこに支えられながらタクシーで移動したおぼえがある。

"花邑"（はなむら）と言えれば地元の運ちゃんはずっと着けてくれるから、大きな屋敷というのは便利だ。

そんなとりとめもないことを考えながら、ぼんやりと寝返りをうつお、そこにまこがいた。

(.....着物.....)

和服姿である。

ぴしりと細身の軀（からだ）にかたち良くきちきち着付けて、色も柄も、年頃にふさわりからず大層地味なのだろうが。

のぞける白い袂（たもと）よりさらに淡く透ける二の腕が、息をつめるほど華やかだ。

(まこ.....)

「あ、起きたか？」

気配を感じてふり返る。手には行平（ゆきひら）。

「まったくも一っ、おまえってば...っ」

窓辺から歩みよってくる、案に相違して、軽い裾（すそ）さばきは縒（よ）れてつまずくような未熟なものではなく。

ゆるやかに膝をつく。

「医者が、言ってたぞ。三、四日絶食状態だって？」

本人が自覚する以上に体はこたえていたのだ。

わはは...とひきつり笑いする貴明の前に、まこは黙って据えてあった盆のうえに鍋敷きをしいて行平をのせ、射し出した。

「おれが創ったから味は保証せんけど」

湯気のたつ黄金（たまご）おじやに色々と具がのっている。

父子家庭で育った人間は必要上、かなり料理がうまいのを、もちろん貴明は知っていた。

合掌して、ありがたく戴く。

「祖母様がよく許したな」

時計を見るととうにHRは終わっている頃である。

「許してない。おかげで今日一日この格好だ」

ふてている。

「似合うぞ。」

.....ちょっと、怒った。

二度ほどおかわりをして他にも随分食べさせてもらい、やっと人心地がついたところで、ゆるゆるとまこが煎茶をいれる。

「で？」

自分もひとくち含んで、訊く。

「親父が、帰ってこなくなってさあ...」

仕事虫の父と、気をまわしすぎる専業主婦の、それでも、昔は、幸福だったはずの家なのだ。

冬がきたのはいつの頃だったのか。

「海外出張のはずが、親父の従弟（いとこ）が死んでさ。電話をしたら、今、本社に勤務して
ますっつって…… 東京だぜ？」

まこは、黙っている。

「今度こそ離婚（わか）れる、っておフクロと姉貴がイナカ行っちまって。…ついてかない、っ
たら、怒って冷蔵庫の中味全部処分してくんだよな。

まあ、あの女（ひと）もヒステリー起こしてたから…」

「そういう時は、さっさと家（うち）に來い！」

「動く気、しなかったんだ」

さわさわと、離れで女性たちの華やぐ声が聞こえる。

今日は茶道か、三味線のお稽古だろうか。

どこかでヒバリが鳴き…

日舞だったらしい。カセットの、邦楽が流れた。

「あのさっ」

まこが、言う。

笛の音。

「…あの…。 だから …」

らしくもなく、言い淀むのを、「なんだ？」と、少し笑いを含んで貴明は尋ねる。

「一度。ちゃんと言っとかなきゃと、思ってたんだけど… その、色々考えて… 」

煮えきらない。気づけば、頬が真紅になっている。

「だから……何だよ？」

「色々考えて… おれみたいなのを、って、おまえ、やっぱりヘンだと思うけど… けど、おれも。

おれも、一緒にヘン… みたい、だから……っ」

襟あしからのぞく項（うなじ）まで朱の花に染まっている。

貴明は上体を傾けた。

「…好きだ…って？」

声がかすれる。

のぞきこむと、こっくと肯く。

仕種が妙に子供のようだ。…たぶん、二人して泣きそうな顔をしてたに違いない。

「 まこ 」

どうしよう。触れたくるではないか。

そおっと手をのばす。熱をおびた柔らかい小さなほほ。

静かに、そおっと、そおっと…

うおっとな。

わざとらしく咳ばらいが響いた。

「朝っばらからお子達は…。そこまでに、して貰いますえ」

ばばっと、飛びはなれる。貴明など壁ぎわまでへばりついてしまっている。

自分でもよく解っていないまこの方がまだ冷静だった。

「で～……っ！ 時間っ！」

そうだった。今日は稽古に参加するように言われて、だから着物になったのだ。

しゃきしゃきと、祖母様は振り返りもせず渡り廊下を去って行く。

「お水を飲んでからお出でなさいよ。ひと舞、御手本にさして貰いますからね」

「へえいっ！」

「返事！」

「はいっ」

ぱたぱたと、小はぜの光る白足袋が反対側へ急ぐのを見送って、貴明は素直に、地面にめりこんだのだった。

F I N .

エブリスタ主催「マンガボックス原作賞」
(2017年7月31日〆切)
に応募したやつが、こっちに入ってます。



http://estar.jp/_novel_view?w=24664798

リステラス星圏史略
古資料ファイル
3 - 4 - 1
『五月病』

<http://p.booklog.jp/book/114731>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/114731>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト